科目名	外科学系（耳鼻咽喉科学・形成外科学）				
科目名（英）					
単位数	1	時間数	30時間	担当者	増田孝・九州大学 形成外科
実施年度	2023年度	実施時期	後期Ⅰ	担当者実務経験	医師として病院に勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年				
授業概要	言語聴覚障害および言語聴覚臨床について学修するうえで基礎となる人体のしくみと疾患・治療に関する知識・技能・態度を修得する。				
授業形態	講義:　○	演習:	実習:	実技:	※　主たる形態:○　その他:△

学習目標（到達目標）

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○					鼻・副鼻腔の構造と機能を説明できる
○					耳鼻咽喉科関連の疾患を概説できる
○					顔面や皮膚の成り立ちを理解し説明することができる
○					顔面・皮膚疾患について理解し、説明することができる

テキスト・教材 参考図書

教科書：医学書院、2007　鳥山稔（編）「言語聴覚士のための基礎知識　耳鼻咽喉科学　第2版」

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	鼻・副鼻腔の解剖、機能	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
2	鼻・副鼻腔の疾患	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
3	外耳の疾患	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
4	中耳の疾患	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
5	内耳の疾患	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
6	頭頚部外科の解剖、疾患	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
7	定期試験	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
8	形成外科総論	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
9	口唇裂	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
10	口蓋裂	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
11	頭蓋、顔面の先天異常	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
12	頭頚部外科に伴う障害	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
13	瘢痕とケロイド	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
14	組織移植	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）
15	定期試験	授業内容を再度まとめ、必要事項を繰り返し学習する（30分）

評価方法

(1)定期試験（筆記）を実施する。
以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A（80点以上）・B（70点以上）・C（60点以上）・D（59点以下）とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験	○	○				100%

履修上の注意

科目名	臨床神経科学				
科目名(英)	clinical neuroscience				
単位数	1	時間数	15時間	担当者	金森　祐治
実施年度	2023年度	実施時期	後期Ⅰ	担当者実務経験	医師として病院に勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年				
授業概要	言語聴覚障害および言語聴覚臨床について学修するうえで臨床神経科学に関する知識、技能、態度を習得する。				
授業形式	講義:　○	演習:	実習:	実技:	※　主たる形態:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				中枢神経系疾患の病態、診断、治療について説明できる。
○	○				覚醒下脳手術について説明できる。
○	○				脳電気刺激法・脳磁気刺激法を使用した治療法について説明できる。
○	○				基本的な神経学的検査について説明できる。

テキスト・教材 参考図書

医学書院　川平 和美 . 神経内科学 第5版 (標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野). 、
医歯薬出版株式会社中島 雅美.　理学療法士・作業療法士　PT・OT基礎から学ぶ　神経内科学ノート.

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	意識障害の基本、感覚障害	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(30分)
2	脳血管障害(脳梗塞、脳出血、くも膜下出血、その他の脳血管障害)	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(30分)
3	頭部外傷、脳腫瘍	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(30分)
4	変性疾患(大脳基底核疾患、運動ニューロン疾患、脊髄小脳変性症、その他の変性疾患)	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(30分)
5	脱髄疾患、末梢神経障害	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(30分)
6	運動ニューロン疾患、筋疾患	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(30分)
7	覚醒下脳手術、脳電気刺激法・脳磁気刺激法	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(30分)
8	神経学的検査(意識、感覚・知覚、反射、筋力、筋トーヌス、筋委縮、不随意運動、協調運動障害、自律運動障害等)	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(30分)

評価方法

(1)定期試験(筆記)を実施する。
以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験	○	○				100%
小テスト						
宿題・レポート						
発表・作品						

履修上の注意

科目名	臨床医学講座Ⅰ				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	15時間	担当者	灘吉　享子
実施年度	2023年度	実施時期	後期Ⅰ	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部1年				
授業概要	言語聴覚障害および言語聴覚臨床について学修する上で基礎となる人体のしくみ・疾患・ことばの成り立ちに関する知識を修得する。				
授業形態	講義:　○	演習:　△	実習:	実技:	※　主たる方法:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○		○		言語聴覚士の資格に求められる基礎的知識の水準を意識できる。
○	○				小項目分類ごとの過去問題から正しい答えを選択できる。
○	○				小項目分類ごとの過去問題を解説できる。

テキスト・教材 参考図書

教科書:医歯薬出版株式会社、2018　大森孝一ほか「言語聴覚士テキスト第3版」
参考図書:国家試験過去問題集

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	実力テスト(前期の基礎科目　国試形式50問)	自己採点を行い、誤っている部分をチェックする
2	実力試験の振り返り　問題への書き込み学習	授業時間内で行えなかった書き込みを行う
3	生涯発達心理学　STテキストの読み込み	STテキストテストに向けて覚えこみを行う
4	生涯発達心理学　STテキストテスト	テキストテストで覚えてない部分を書き出す
5	解剖生理学　STテキストテストの読み込み	STテキストテストに向けて覚えこみを行う
6	解剖生理学　STテキストテストテスト	テキストテストで覚えてない部分を書き出す
7	実習について　先輩から話を聴く会	実習について聞きたいことを事前に考えておく。終了後に感想文を書く。
8	自己プロフィールを作成	期日内に提出するように準備を行う
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		

評価方法

以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
STテキストテスト	◎	○				
課題提出				○		

履修上の注意

科目名	呼吸発声発語系医学				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	30時間	担当者	灘吉　享子
実施年度	2023年度	実施時期	後期Ⅰ	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年				
授業概要	言語聴覚士に必要な呼吸機能に関わる、解剖の知識を修得し、そのメカニズムについて結びつけることができる。そして、基本的な意識をもって、呼吸リハビリテーションについて考える基礎をつくる。				
授業形態	講義:　○	演習:　△	実習:	実技:	※　主たる方法:○　その他:△

学習目標（到達目標）

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				呼吸器系の基本構造と機能が説明できる。
○	○				呼吸器系の疾患の名称を列挙できる。
○	○				呼吸器系の疾患の特徴を概説できる。
○	○				呼吸器系の疾患の特徴を概説できる。
			○	○	サンプルCD聴取によりそれぞれの疾患の症状がイメージできる

テキスト・教材 参考図書

教科書:　医学書院　言語聴覚士のための基礎知識　耳鼻咽喉科学第2版
参考書:　医歯薬出版株式会社　言語聴覚士テキスト

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	呼吸発声発語概要と呼吸器系の基本構造	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。(30分)
2	呼吸器系の呼吸運動について	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。(30分)
3	呼吸器の解剖と検査	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。(30分)
4	呼吸訓練の実際	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。(30分)
5	喉頭の基本構造	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。(30分)
6	喉頭の機能	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。(30分)
7	喉頭の検査	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。(30分)
8	構音器官の基本構造	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。(30分)
9	構音器官の機能	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。(30分)
10	1～9のまとめテスト/国家試験問題	解説づくりをする(30分)
11	疾患(呼吸器)	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。(30分)
12	疾患(喉頭)/サンプルCDの聴取	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。(30分)
13	疾患(付属管腔)./サンプルCDの聴取	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。(30分)
14	症例検討	教科書・配布プリントをもとに復習する。小テストへの取り組みを行う。(30分)
15	10～13のまとめテスト/国家試験問題	解説づくりをする(30分)

評価方法

(1)定期試験(筆記)を実施する。(2)小テストを実施する(3)レポート課題をもとめる
以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験(筆記)	◎	◎				70%
小テスト	○	○				15%
宿題・レポート		○		○		10%
質問・取り組み				○	○	5%

履修上の注意

科目名	聴覚系医学				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	30	担当者	星子隆裕
実施年度	2023年度	実施時期	後期Ⅰ	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科（昼夜間部）　1年				
授業概要	言語聴覚障害および言語聴覚臨床について学修する上で基礎となる人体のしくみ・疾病と治療に関する知識・技能・態度を修得する。				
授業形態	講義：　○	演習：	実習：	実技：	※　主たる形態：○　　その他：△

学習目標（到達目標）

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				聴覚器の構造と機能を説明できる。
○	○				聴覚検査を列挙し、それぞれの概要を説明できる。
○	○				聴覚系の疾患の名称を列挙できる。
○	○				聴覚系の疾患の特徴を概説できる。
			○	○	授業時に質問ができる。課外学習の取り組みがある。

テキスト・教材 参考図書

教科書：病気が見える　耳鼻咽喉科
参考図書：言語聴覚士テキスト、言語聴覚士のための基礎知識耳鼻咽喉科学、イラスト耳鼻咽喉科ほか

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	音をとらえる聴覚の機能	動画を視聴して、A4用紙一枚に耳のイラストを描いてくる。授業の内容をA4用紙一枚にまとめる
2	外耳と中耳の構造と機能	授業内容をA4用紙1枚にまとめる（30分） 次回講義時に提出する
3	中耳と内耳の構造と機能	授業内容をA4用紙1枚にまとめる（30分） 次回講義時に提出する
4	伝音機構と感音機構のまとめ	これまでの授業内容をA4用紙1枚にまとめる（60分）
5	平衡機能と他器官の関連と単元テスト	単元テストのやり直し 授業内容をA4用紙1枚にまとめる（30分）
6	聴覚系の病態	授業内容をA4用紙1枚にまとめる（30分） 次回講義時に提出する
7	基本的な自覚的聴覚検査	授業内容をA4用紙1枚にまとめる（30分） 次回講義時に提出する
8	内耳機能検査	授業内容をA4用紙1枚にまとめる（30分） 次回講義時に提出する
9	診断的な自覚的聴覚検査・聞こえの評価	授業内容をA4用紙1枚にまとめる（30分） 次回講義時に提出する
10	他覚的聴覚検査	これまでの授業内容をA4用紙1枚にまとめる（60分） その1枚のみ、単元テストに持ち込み可とする
11	聴覚発達と小児聴覚検査と単元テスト	単元テストのやり直し 授業内容をA4用紙1枚にまとめる（30分）
12	先天性疾患と外耳疾患	授業内容をA4用紙1枚にまとめる（30分） 次回講義時に提出する
13	その他の疾患	授業内容をA4用紙1枚にまとめる（30分） 次回講義時に提出する
14	ケースワーク	これまでの授業内容をA4用紙1枚にまとめる（60分）
15	まとめと単元テスト	単元テストのやり直し

評価方法

(1)授業の中で単元テストを3回実施する。　(2)宿題（A4一枚まとめ）を数回実施する。
以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準はA（80点以上）・B（70点以上）・C（60点以上）・D（59点以下）とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
単元テスト	◎					75%
質問・疑問		◎		○	○	25%

履修上の注意

授業資料およびまとめ課題はファイリングすること。
出席が10回に満たない場合は、評価対象とならない。

科目名	学習・認知心理学				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	30時間	担当者	大森　晶子
実施年度	2023年度	実施時期	後期Ⅰ	担当者実務経験	言語聴覚士として施設に勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年				
授業概要	人間の認知に関与する感覚、知覚、注意、記憶、言語、知識、思考などについて学習する。				
授業形態	講義:　○	演習:　△	実習:	実技:	※　主たる形態:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	△				感覚・知覚・認知過程の基本概念と主要理論を説明できる
○	△				思考・知識の表象、構造と主要理論を説明できる
○	△				感覚・情動・動機づけの基本概念と主要理論を説明できる
○	△				学習の基本概念と主要理論を説明できる

テキスト・教材 参考図書

・サイエンス社　学習の心理　行動のメカニズムを探る

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	学習認知心理学の概要～心理学領域内での位置づけ～	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)
2	感覚 (感覚の種類、感覚可動範囲と感度、物理量と心理量)	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)
3	感覚 (感覚モダリティと感覚の統合、順応と対比)	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)
4	知覚・認知 (色彩感覚、奥行き知覚、図地弁別と形態知覚)	感覚についてまとめておくこと、教科書の該当範囲の予習をすること
5	知覚・認知 (運動知覚、知覚恒常性、運動協応)	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)
6	知覚・認知 (認知地図、対人認知、感覚遮断)	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)
7	学習 (古典的条件づけとオペラント条件づけ)	知覚・認知についてまとめておくこと、教科書の該当範囲の予習をすること
8	学習 (強化)	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)
9	学習 (弁別学習、技能学習、社会的学習)	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)
10	学習 (学習の転移と動機づけ、要求水準)	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)
11	記憶 (記憶過程、短期記憶と長期記憶)	学習についてまとめておくこと、教科書の該当範囲の予習をすること
12	記憶 (記憶範囲、記憶容量、忘却)	教科書の該当範囲を事前に読み、わからない用語等は調べておくこと(1時間)
13	思考 (問題解決、概念形成と概念の獲得、概念の構造)	記憶についてまとめておくこと、教科書の該当範囲の予習をすること
14	思考 (象徴、イメージ、スキーマ、推理)	記憶についてまとめておくこと、教科書の該当範囲の予習をすること
15	定期試験	定期試験対策のまとめを作成すること

評価方法

(1)授業の中で小テストを5回実施する。 (2)レポートを数回実施する。 (3)定期試験(筆記)を実施する。
以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験(筆記)	◎	○				80%
小テスト	◎	◎				10%
レポート	○	◎				10%

履修上の注意

科目名	音響学（聴覚心理学含む）				
科目名（英）					
単位数	1	時間数	30時間	担当者	井上　仁郎
実施年度	2023年度	実施時期	後期Ⅰ	担当者実務経験	
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年				
授業概要	言語聴覚障害および言語聴覚臨床について学修する上で基礎となる言語とコミュニケーションに関する知識・技能・態度を修得する。				
授業形態	講義：　○	演習：	実習：	実技：	※　主たる形態：○　その他：△

学習目標（到達目標）

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				音の物理的側面の基本的概念が説明できる
○	○				言語音の音響的特性を理解し、調音との関係を説明できる
○	○				音声知覚に関する基本概念と知識を説明できる

テキスト・教材 参考図書

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	波の一般的性質	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
2	音の物理的性質：音圧、デシベル	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
3	音の物理的性質：音響パワー、音の強さのレベル、音圧レベル	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
4	音の物理的性質：音の伝搬と距離減衰、ドップラー効果	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
5	音の大きさの知覚	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
6	音の周波数分析：スペクトルとその表現	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
7	音の高さの知覚	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
8	電気音響機器	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
9	アナログとデジタル	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
10	マスキング	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
11	臨界帯域と聴覚フィルタ	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
12	両耳聴	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
13	MLD、先行音効果	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
14	聴覚心理学のまとめと補足	講座を振り返りまとめ、繰り返し学習する（30分）
15	定期試験	講座全体を振り返り学習をする（1時間）

評価方法

1）定期試験（筆記）を実施する。
成績評価基準は、S（90点以上）・A（80点以上）・B（70点以上）・C（60点以上）・D（59点以下）とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験	○	○				100%
小テスト						
宿題・レポート						
発表・作品						

履修上の注意

科目名	地域言語聴覚療法				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	30時間	担当者	井上　宜彦
実施年度	2023年度	実施時期	後期Ⅰ	担当者実務経験	訪問事業所にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年				
授業概要	2025年を目途に地域包括ケアシステムの構築が進められている。地域言語聴覚療法を行う上での言語聴覚障害および言語聴覚臨床の基礎となる社会福祉、リハビリテーションに関する基本的知識を修得する。また、地域資源を調査し、地域の特徴を習得する。				
授業形態	講義:　○	演習:　△	実習:	実技:	※　主たる形態:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				地域リハビリテーションの社会的背景と意義を説明できる。
○	○				成人・高齢者の地域生活への支援を説明できる。
○	○				地域包括ケアシステムでの言語聴覚士の役割について説明できる。
○	○		○		地域住民に向けて、講座を模擬的に開催することができる
○	○		○		居住地の地域資源について調査し、レポートを提出することができる

テキスト・教材 参考図書

教科書:医学書院、2019　藤田郁代(監)「標準言語聴覚障害学　地域言語聴覚療法学」

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	地域リハビリテーションの社会的背景と意義	教科書や配布資料を読み返す(30分)
2	地域言語聴覚療法の特徴	教科書や配布資料を読み返す(30分)
3	地域言語聴覚療法を支えるシステムと制度	教科書や配布資料を読み返す(30分)
4	地域言語聴覚療法の展開:アセスメントとリスク管理	教科書や配布資料を読み返す(30分)
5	地域言語聴覚療法の展開:支援計画および訓練・指導・援助	教科書や配布資料を読み返す(30分)
6	リハビリテーション計画書を読み取る	教科書や配布資料を読み返す(30分)
7	通所系サービスの実際	教科書や配布資料を読み返す(30分)
8	入所系サービスの実際	教科書や配布資料を読み返す(30分)
9	災害リハとコミュニケーション機器	教科書や配布資料を読み返す(30分)
10	地域包括ケア　これからのSTに期待すること	教科書や配布資料を読み返す(30分)
11	地域言語聴覚療法の展開(介護予防事業)　exercise　難聴ってなに?	教科書や配布資料を読み返す(31分)
12	地域言語聴覚療法の実際-先輩言語聴覚士から話をきく-訪問リハ	教科書や配布資料を読み返す(31分)
13	地域を知る-地域資源を調べてみよう-(作成とレポート課題)	PCを使って調査を行う
14	地域住民向け健康講座開催準備	発表を行い、課題に対しての気づきをまとめる
15	地域向け健康講座を模擬的に実施する	講座全体を振り返り、学修する(1時間)

評価方法

(1)レポートを実施する。(2)発表を評価する。双方ともルーブリックにて評価する。
以下を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)　・B(70点以上)　・C(60点以上)　・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
レポート課題	○	○				50%
発表評価		○		○		50%

履修上の注意

科目名	失語症・高次脳機能障害の展開				
科目名(英)	Deployment of Aphasia and Higher brain dysfunction　General remarks				
単位数	1	時間数	30時間	担当者	竹下　万里子
実施年度	2023年度	実施時期	後期Ⅰ	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年生				
授業概要	失語症と高次脳機能障害の評価や訓練に関する基礎知識を習得する。 失語症や高次脳機能障害のリハビリテーションにおける職種連携について学ぶ。 失語症や高次脳機能障害関連の文献抄読を通して、言語聴覚療法における訓練・指導・支援や地域社会とのかかわりについて考える。				
授業形式	講義:	演習:　○	実習:	実技:	※　主たる形態:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				失語症と高次脳機能障害の評価の目的や評価の流れについて説明できる。
○	○				失語症と高次脳機能障害の評価の際に収集する情報や検査方法を挙げることができる。
○	○		○		失語症と高次脳機能障害のリハビリテーションについて、関連の文献を検索し、概要を説明できる。
○	○		○		国家試験の問題に取り組み説明することが出来る。

テキスト・教材 参考図書

ﾃｷｽﾄ:文光堂　2015　網本和 高次脳機能障害ABC 、医師薬出版　2022　石合純夫　高次脳機能障害学　第3版
参考図書:　医学書院　2021　藤田郁代　標準言語聴覚障害学　失語症
医学書院　2021　藤田郁代　標準言語聴覚障害学　高次脳機能障害学

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	言語聴覚療法の評価の目的と流れ	テキストの該当項を30分読んでおく。
2	失語症　高次脳機能障害の評価の原則	資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 確認テストを実施するので、復習しておく
3	関連障害の評価や対応法について	資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 確認テストを実施するので、復習しておく
4	情報収集の種類	資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 確認テストを実施するので、復習しておく
5	情報収集　観察の方法	資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 確認テストを実施するので、復習しておく
6	言語面の情報　　スクリーニング検査	資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 確認テストを実施するので、復習しておく
7	言語面の情報　掘り下げ検査	資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 中間期の小テストを実施するので、復習しておく
8	情報収集　医学面　社会面　関連情報について	資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 確認テストを実施するので、復習しておく
9	情報の統合　評価のまとめ	資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 確認テストを実施するので、復習しておく
10	問題点の抽出と目標設定	資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 確認テストを実施するので、復習しておく
11	失語症と高次脳機能障害　言語聴覚療法の理論と技法	資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 確認テストを実施するので、復習しておく
12	失語症と高次脳機能障害のリハビリテーション　訓練から支援	資料、テキストの該当項を30分復習しておく。 確認テストを実施するので、復習しておく
13	失語症と高次脳機能障害のリハビリテーション　地域との連携	資料、テキストの該当項を30分復習しておく。
14	失語症と高次脳機能障害のリハビリテーション　症例検討	資料、テキストの該当項を30分復習しておく。
15	まとめ	定期試験に向け30分以上復習しておく

評価方法

(1)授業の中で小テスト1回(中間期)、クラッシ-を10回実施する。 (2)レポートを数回実施する。 (3)定期試験(筆記)を実施する。以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験	○	○				70%
小テスト	○	○		○		20%
レポート・発表	○	○		○		10%

履修上の注意

科目名	失語症の理解				
科目名(英)	Learning of Aphasia				
単位数	1	時間数	30時間	担当者	高津原　直樹
実施年度	2023年度	実施時期	後期Ⅰ	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年				
授業概要	・基本的な失語症についての定義、知識を習得する。 ・失語症古典的分類におけるそれぞれの特徴を把握し、鑑別する。 ・言語症状を認知神経心理学的モデルにあてはめて考え、その発現機序を説明する。 ・総合的失語症検査(SLTA)をマニュアルを見ながら実施する。				
授業形式	講義:　○	演習:　△	実習:	実技:	※　主たる形態:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				失語症の定義について説明することができる。
○	○				失語症の古典的タイプ分類ができる。
○	○				失語症と近縁症状との鑑別ができる。
○	○				失語症の各タイプの代表的な特徴を、何も見ずに列挙できる。
		○	○		失語症総合的検査(SLTA)を模擬的に実施できる。

テキスト・教材 参考図書

・新興医学出版社　小嶋　知幸著　なるほど失語症の評価と治療
・SLTA 標準失語症検査　マニュアル
・医学書院　藤田　郁代著　失語症学第2版

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	失語症の定義 原因疾患、責任病巣	Formsで繰り返し課題を実施(30分) 復習用動画視聴(60分)
2	失語症の症状(聴く) 認知神経心理学的モデルの活用	Formsで繰り返し課題を実施(30分) 復習用動画視聴(60分)
3	失語症の症状(話す)Ⅰ 認知神経心理学的モデルの活用	Formsで繰り返し課題を実施(30分) 復習用動画視聴(60分)
4	失語症の症状(読む) 認知神経心理学的モデルの活用	Formsで繰り返し課題を実施(30分) 復習用動画視聴(60分)
5	失語症の症状(書く) 認知神経心理学的モデルの活用	Formsで繰り返し課題を実施(30分) 復習用動画視聴(60分)
6	単元試験Ⅰ(第1～6回までの範囲)	第1～5回までの内容を復習しておく(30分)
7	古典的分類:ブローカ失語、ウェルニッケ失語	Formsで繰り返し課題を実施(30分) 復習用動画視聴(60分)
8	古典的分類:伝導失語、失名辞失語、全失語	Formsで繰り返し課題を実施(30分) 復習用動画視聴(60分)
9	古典的分類:超皮質性失語(運動性、感覚性、混合性)	Formsで繰り返し課題を実施(30分) 復習用動画視聴(60分)
10	単元試験Ⅱ(第8～10回までの範囲)	第7～9回までの内容を復習しておく(30分)
11	その他の失語症候群: 語義失語、皮質下性失語、原発性進行性失語	Formsで繰り返し課題を実施(30分) 復習用動画視聴(60分)
12	純粋型①:純粋語聾、純粋発語失行、純粋失読	Formsで繰り返し課題を実施(30分) 復習用動画視聴(60分)
13	純粋型②:純粋失書、失読失書	Formsで繰り返し課題を実施(30分) 復習用動画視聴(60分)
14	後天性小児失語症	Formsで繰り返し課題を実施(30分) 復習用動画視聴(60分)
15	授業内評価	失語症の理解の内容を国家試験過去問を中心に復習しておく(30分)

評価方法

(1)授業の中で小テストを10回実施する。(2)毎回授業後にFormsにて課題を配信する。(3)定期試験(筆記)を実施する。
以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験	○	○				40%
単元試験	○	○				40%
小テスト	○	○				10%
宿題・レポート	○	○		○		10

履修上の注意

科目名	発達障害・SLIの理解				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	15時間	担当者	永野　淳子
実施年度	2023年度	実施時期	後期	担当者実務経験	小児施設にて心理担当職員として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年				
授業概要	発達障害(自閉症スペクトラム障害、学習障害、注意欠如/多動性障害)、特異的言語発達障害の基本的概念と知識を習得する。 自閉症スペクトラム障害・学習障害・注意欠如/多動性障害のそれぞれの関連を学ぶ。				
授業形態	講義:　○	演習:　△	実習:	実技:	※　主たる形態:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				自閉症スペクトラム障害・学習障害・注意欠如/多動性障害、特異的言語発達障害の定義を説明できる
○	○				自閉症スペクトラム障害・学習障害・注意欠如/多動性障害、特異的言語発達障害の診断基準を説明できる
○	○				自閉症スペクトラム障害・学習障害・注意欠如/多動性障害、特異的言語発達障害の症状を説明できる
○	○		○		各疾患で言語発達障害が生じる原因と発症メカニズムを推論できる
○	○		○		当事者、家族、関係者の心理を概説できる

テキスト・教材 参考図書

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	発達障害の定義	該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)
2	発達障害の診断基準(DSM－5、ICD-11)	該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)
3	発達障害の言語領域の症状(語彙・文法、コミュニケーション)	該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)
4	発達障害の言語領域の症状(発声発語、読み書き、認知)	該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)
5	特異的言語発達障害の概要(定義と診断基準)	該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)
6	特異的言語発達障害の言語領域の症状	該当箇所の予習および講義後の復習をしておくこと(30分)
7	当事者、家族、関係者の心理の理解	事例検討資料の作成(60分)
8	定期試験	
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		

評価方法

(1)定期試験(筆記)を実施する。
(2)事例検討課題(レポート)を実施する。
以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験	◎	◎				70%
レポート(事例検討)	○	◎		◎		30%

履修上の注意

科目名	知的障害の展開				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	45時間	担当者	三田　智巳・永江　信吾
実施年度	2023年度	実施時期	後期Ⅰ	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部1年				
授業概要	知的障害児に対する言語聴覚療法の評価診断、および言語治療(指導・支援)に関する知識、技能、態度を習得する。				
授業形態	講義:　△	演習:　○	実習:	実技:　△	※　主たる形態:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				知的障害児に対する言語治療における言語聴覚士の役割を説明できる
○	○		○		言語聴覚療法の評価診断の基本概念と方法を説明し、模擬的に実施でき、レポートが作成できる

テキスト・教材 参考図書

石田宏代・石坂郁代/編　言語聴覚士のための言語発達障害学　第2版　(医歯薬出版)2016年
藤田郁代/編　標準言語聴覚障害学　言語発達障害学　第2版(医学書院)2017年

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	知的障害児の評価診断とは	30分程度の予習・復習を行う
2	知的障害児の言語治療(指導・支援)とは	30分程度の予習・復習を行う
3	評価診断(評価診断の原則、手続き、情報収集の方法)	30分程度の予習・復習を行う
4	評価診断(認知行動面、環境面の情報収集言語面の評価	30分程度の予習・復習を行う
5	言語面の評価(言語理解・表出、コミュニケーション、スピーチ領域)	340分程度の予習・復習を行う
6	発達面の評価(遠城寺式乳幼児分析的発達検査)	30分程度の予習・復習を行う
7	言語面の評価(LCスケール)検査の特徴と手応え課題	30分程度の予習・復習を行う
8	言語面の評価(LCスケール)手応え課題からの展開方法	30分程度の予習・復習を行う
9	言語面の評価(FOSCOM)	30分程度の予習・復習を行う
10	言語面の評価(国リハ式〈S-S〉法言語発達遅滞検査)概論	30分程度の予習・復習を行う
11	言語面の評価(国リハ式〈S-S〉法言語発達遅滞検査)各論	30分程度の予習・復習を行う
12	実技練習	30分程度の予習・復習を行う
13	言語面の評価(J.COSS日本語理解テスト)	30分程度の予習・復習を行う
14	言語面の評価(小学生の読み書きスクリーニング検査)	30分程度の予習・復習を行う
15	言語面の評価(絵画語彙発達検査)	30分程度の予習・復習を行う
16	言語面の評価(質問ー応答関係検査)概論	30分程度の予習・復習を行う
17	言語面の評価(質問ー応答関係検査)結果の見方	30分程度の予習・復習を行う
18	言語面の評価(ことばのテスト絵本)	30分程度の予習・復習を行う
19	実技練習	30分程度の予習・復習を行う
20	ケーススタディ(模擬症例の情報収集、評価方法の立案)	グループワークで情報収集、評価計画を話し合う 検査練習(30分)
21	ケーススタディ(模擬症例の評価演習)	検査練習(30分)
22	ケーススタディ(模擬症例の評価結果のまとめ)	結果のまとめ作成(30分)
23	定期試験	講座全体を振り返り、試験対策を行う(60分)

評価方法

(1)小テストを複数回実施する。(3)レポート作成を複数回実施する。
以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験	○	○				50%
小テスト	○	○				25%
レポート	○	○		○		25%

履修上の注意

科目名	機能性構音障害の理解と展開				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	30時間	担当者	梶原　智津
実施年度	2023年度	実施時期	後期Ⅰ	担当者実務経験	言語聴覚士として施設に勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年				
授業概要	機能性構音障害の基礎知識、構音検査の実施と分析方法を習得する、系統的構音訓練 の枠組みを知り立案・実施・評価を実践できる力を身につける。関連分野の理論的背 景、エビデンスに基づく臨床思考を身につける。				
授業形態	講義:	演習:　○	実習:	実技:	※　主たる形態:○　その他:△

学習目標（到達目標）

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				過去の履修した音声学の知識を構音障害臨床との関連について説明できる。
○	○				機能性構音障害の定義とその症状について説明することができる。
○	○	○			機能性構音障害に関わる検査を選択することができ遂行することができる。
○	○	○			訓練プログラムの概要を理解し説明することができる。
○	○	○			それぞれの訓練内容におけるPLAN・DO・SEEの過程を実行することができる。

テキスト・教材 参考図書

・医学書院　音声表記・音素表記　記号の使い方ハンドブック
・医学書院　標準言語聴覚障害学「発声発語障害学」
参考文献:改訂版　機能性構音障害 改訂第3版　聴覚言語療法臨床マニュアル

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	音声学・音韻論と臨床の接点	指定教科書と過去の音声学の教科書および配布プリントを使用し復習をしておく
2	発達途上の小児の構音障害	教科書と配布プリントを使用し復習しておく
3	演習）構音類似運動検査	自主演習をしておく
4	演習）構音検査、結果のまとめと分析	自主演習および配布プリントを使用し復習しておく
5	系統的構音訓練の枠組み	自主演習および配布プリントを使用し復習しておく
6	演習）構音訓練の立案・実施・評価（単音～単音節レベル）	自主演習および配布プリントを使用し復習しておく
7	演習）構音訓練の立案・実施・評価（連続音節レベル①教材の留意点）	自主演習および配布プリントを使用し復習しておく
8	演習）構音訓練の立案・実施・評価（連続音節レベル②実施の留意点）	自主演習および配布プリントを使用し復習しておく
9	演習）構音訓練の立案・実施・評価（単語レベル）	自習演習および配布プリントを使用して復習しておく
10	演習）構音訓練の立案・実施・評価（句・短文レベル）	自主演習および配布プリントを使用して復習しておく
11	演習）構音訓練の立案・実施・評価（句・短文レベル）	自習演習および配布プリントを使用して復習しておく
12	演習）構音訓練の立案・実施・評価（般化アプローチ）	自主演習および配布プリントを使用して復習しておく
13	異常構音への対応	配布プリントを使用して復習しておく
14	音声知覚・音韻処理について	配布プリントを使用して復習しておく
15	まとめ	配布プリントを使用して復習しておく

評価方法

(1)授業の中で小テストを5回実施する。（2)定期試験（筆記）を実施する。
以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A（80点以上）・B（70点以上）・C（60点以上）・D（59点以下）とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験（筆記）	○	○	○			85%
小テスト	○	○	○			15%

履修上の注意

科目名	運動障害性構音障害の理解				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	30時間	担当者	潮﨑　桃子
実施年度	2023年度	実施時期	後期	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部1年				
授業概要	構音運動のメカニズムについて理解し説明できる。構音障害の特徴について理解し,運動障害性構音障害の診断と分類ができる。評価実習に向けて言語聴覚士に必要なふるまいやコミュニケーション態度、学習能力の基礎を築き、個人の課題を具体的に見つけることができる。				
授業形態	講義:　△	演習:　○	実習:	実技:　△	※　主たる形態:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				運動障害性構音障害の発現機序を説明するために、構造と機能を説明できる
○	○				運動障害性構音障害の病態について説明できる。
	○	○			運動障害性構音障害について、一般情報収集から問診および検査について説明できる
			○		言語聴覚士としてのふるまいについてイメージを持ち、態度に反映することができる。
			○	○	授業において疑問に思うことができ、問題解決のために質問に結び付けることができる

テキスト・教材 参考図書

ディサースリア臨床標準テキスト　西尾正輝　著/医歯薬出版株式会社
運動障害性構音障害学　廣瀬肇　著/医歯薬出版株式会社
言語聴覚士ドリルプラス運動障害性構音障害　大塚裕一　編集/株式会社　診断と治療社

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	コミュニケーション障害と運動障害性構音障害/定義・障害構造	指定教科書と過去の音声学の教科書および配布プリントにて復習しておく
2	運動系の基礎理解(運動系の概要、錐体路系、錐体外路系)	教科書と配布資料にて本日の授業まとめをA4一枚に作成する
3	運動系の基礎理解(小脳系・下位運動ニューロン・筋系)	教科書と配布資料にて本日の授業まとめをA4一枚に作成する
4	運動系の基礎理解(発声発語器官の構造および筋肉の働き)	授業まとめの作成、【言語聴覚士ドリルプラス】の運動障害性構音障害にかかわる解剖と生理(10～20ページ)を予習する
5	運動系の障害(錐体路系、錐体外路系)	教科書と配布資料にて本日の授業まとめをA4一枚に作成する
6	運動系の障害(小脳系、下位運動ニューロン)	教科書と配布資料にて本日の授業まとめをA4一枚に作成する
7	発声発語器官の運動機能障害、聴覚的な発話特徴	授業まとめの作成、【ディサースリア臨床標準テキスト】の16～22ページを予習する
8	タイプごとの病態特徴と重症度(弛緩性、痙性、UUMN)	教科書と配布資料にて本日の授業まとめをA4一枚に作成する
9	タイプごとの病態特徴と重症度(運動低下性、運動過多性)	教科書と配布資料にて本日の授業まとめをA4一枚に作成する
10	タイプごとの病態特徴と重症度(失調性、混合性)	教科書と配布資料にて本日の授業まとめをA4一枚に作成する
11	各運動障害性構音障害の特徴のまとめ	今までに学んだ配布資料と教科書、自分で作成した授業まとめを見直す
12	運動障害性構音障害の評価(臨床の流れ、鑑別診断、検査)	教科書と配布資料にて本日の授業まとめをA4一枚に作成する
13	問診・観察を通しての理解(情報収集と問題点抽出、ICF)	教科書と配布資料にて本日の授業まとめをA4一枚に作成する
14	失語症補助テスト	失語症補助テストの教示を書き込む
15	失語症補助テスト、まとめ	失語症補助テストの実技練習をする

評価方法

(1)授業の中で小テストを5回実施する。(2)レポートを数回実施する。(3)定期試験(筆記)を実施する。
以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験	○	○				70%
小テスト	○	○				20%
宿題・レポート	○	○		○		5%
授業内演習			○	○		5%

履修上の注意

科目名	小児聴覚障害の診断				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	30時間	担当者	井上　康子
実施年度	2023年度	実施時期	後期Ⅰ	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年				
授業概要	聴覚障害および関連障害に関する基本的概念と知識を修得する。				
授業形態	講義:　△	演習:　○	実習:	実技:	※　主たる形態:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○		△		コミュニケーションモードについて説明できる
○	○		△		発達段階に応じた聴覚検査を選択できる
○	○		△		聴覚検査の手順を説明できる
○	○		△		本人・家族に評価結果を説明する方法を示すことができる
○	○		△		模擬ケースカンファレンスで報告する内容を示し、模擬的に報告できる

テキスト・教材 参考図書

・建帛社　言語聴覚療法シリーズ5　改定　聴覚障害Ⅰ-基礎編
・建帛社　言語聴覚療法シリーズ6　改定　聴覚障害Ⅱ-臨床編
・南江堂　聴覚検査の実際 改訂3版

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	聴覚障害児をめぐる社会的文化的背景や医療福祉教育の歴史	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
2	コミュニケーションモード	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
3	乳幼児聴覚検査	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
4	聴覚評価	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
5	言語発達評価	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
6	コミュニケーション発達評価	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
7	認知、社会性、情緒評価	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
8	面接評価	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
9	評価演習	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
10	情報の分析、統合、解釈	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
11	聴覚保証機器の適応と訓練の適応	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
12	評価サマリの作成	評価サマリを作成する(1時間)
13	統合と分析、治療計画の作成	治療計画を作成する(1時間)
14	ケースカンファレンス	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
15	定期試験と振り返り	講座全体を振り返り、繰り返し学習する(1時間)

評価方法

(1)レポートを数回実施する。(2)定期試験(筆記)を実施する。
以下を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)　・B(70点以上)　・C(60点以上)　・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験	○	○				70%
小テスト						
宿題・レポート				○		30%
発表・作品						

履修上の注意

科目名	リハビリテーション医学				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	15時間	担当者	医師・専任教員
実施年度	2023年度	実施時期	後期Ⅱ	担当者実務経験	医師及び言語聴覚士として病院勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年				
授業概要	リハビリテーション医療の役割について理解し、その構造を把握する。 また、リハビリテーション医学における関係職種の役割について把握し、チームアプローチの重要性を理解する。				
授業形態	講義:　○	演習:	実習:	実技:	※　主たる形態:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○		○		リハビリテーションの歴史について説明できる。
○	○		○		リハビリテーションの理念と対象について分類でき説明できる。
○	○		○		リハビリテーション関係職種の役割について把握し説明できる。
○	○				救命医学の基本概念が説明できる。
○	○	○			基本的救命措置が実施できる。

テキスト・教材 参考図書

指定教科書はない。配布資料で行う。

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	リハビリテーション医学の歴史	授業資料を基に復習する
2	リハビリテーション医の役割(循環器医師としての視点)	授業資料を基に復習する
3	リハビリテーションの実際(急性期・回復期の目標設定について)	授業資料を基に復習する
4	リハビリテーションの実際(生活期・小児の目標設定について)	授業資料を基に復習する
5	言語聴覚士のADL　STもADLの評価を必要	授業資料を基に復習する
6	リハビリテーションチーム　PT概論(呼吸器リハ・脳血管リハ)	授業資料を基に復習する
7	リハビリテーションチーム　OT概論(精神領域・脳血管リハ)	授業資料を基に復習する
8	救急救命の実際　BLSをマスター	授業資料を基に復習する
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		

評価方法

以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験(筆記)校長先生	◎	◎				35%
実技			○			10%
宿題・レポート		○		○		20%
質問・取り組み				○		5%
小テスト	◎	◎				30%

履修上の注意

科目名	臨床医学講座Ⅱ				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	15時間	担当者	灘吉　享子
実施年度	2023年度	実施時期	後期Ⅱ	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年				
授業概要	言語聴覚障害および言語聴覚臨床について学修する上で基礎となる人体のしくみ・疾患・ことばの成り立ちに関する知識を修得する。				
授業形態	講義:　○	演習:　△	実習:	実技:	※　主たる方法:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○			○		言語聴覚士の資格に求められる基礎的知識の水準を意識できる。
○			○		小項目分類ごとの過去問題から正しい答えを選択できる。
○			○		小項目分類ごとの過去問題を解説できる。

テキスト・教材 参考図書

教科書:医歯薬出版株式会社、2018　大森孝一ほか「言語聴覚士テキスト第3版」
参考図書:国家試験過去問題集

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	後期Ⅰの振り返り　後期Ⅱの過ごし方　臨床実習に向けて	振り返りシートを作成。今後の学習計画を立てる
2	言語機能、認知機能検査について	検査演習シートを作成。今後の練習計画を立てる
3	学習認知心理学　国家試験問題の調べ学習	調べきれなかった単語を調べて、A41枚に書く
4	生涯発達心理学　国家試験問題の調べ学習	調べきれなかった単語を調べて、A41枚に書く
5	精神医学　　国家試験問題の調べ学習	調べきれなかった単語を調べて、A41枚に書く
6	実力テスト	誤ったところはどこかチェックを行う
7	実力テスト	誤ったところはどこかチェックを行う
8	実力テストの振り返り	誤った問題の調べ学習を行う
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		

評価方法

1)定期試験(筆記)を実施する。
成績評価基準は、S(90点以上)・A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
振り返りシート				○		40%
提出物(調べ学習の成果物)	○			○		60%

履修上の注意

科目名	言語聴覚臨床の評価診断				
科目名(英)	Evaluation and Diagnosis of Speech-Language Therapy				
単位数	1	時間数	30時間	担当者	高津原　直樹
実施年度	2023年度	実施時期	後期Ⅱ	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年				
授業概要	言語聴覚療法の評価診断の基本的概念・技能・態度を修得する。				
授業形式	講義:　△	演習:　○	実習:	実技:　△	※　主たる形態:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				言語聴覚療法の評価診断における基本的概念を説明できる。
	○	○			コミュニケーション行動を観察する視点を説明できる。
○	○				評価診断結果をサマリにまとめる枠組みを説明できる。
○	○				言語聴覚障害を総合的に評価し鑑別診断する方法を説明できる。
	○	○	○		言語聴覚療法を総合的に評価し鑑別診断する方法を模擬的に実施できる。

テキスト・教材 参考図書

言語障害　スクリーニングテスト　インテルルナ出版
ST評価　ポケット手帳　ヒューマン・プレス

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	初回(インテーク)面接	レポート① 動画を視聴して観察所見を書く(30分)
2	測定と観察	
3	観察の実践	レポート② A4×1枚以内でスクリーニング検査を自作(30分)
4	スクリーニング検査の構成	
5	STADの構成	STADの練習(30分以上)
6	STADの実践	
7	標準予防策	手洗いと脈拍・血圧測定の練習(30分以上)
8	バイタルサインの測定	
9	サマリーの作成【成人編】	授業資料を振り返り学習をする(30分)
10	サマリーの作成【小児編】	
11	ケースノートの書き方、論文の検索方法	授業資料を振り返り学習をする(30分)
12	論文抄読	
13	リスク管理	授業資料を振り返り学習をする(30分)
14	OSCE	実習に向け授業で学んだ内容を復習・練習(30分以上)
15	OSCE	

評価方法

(1)OSCEを実施する。(2)レポートを1回実施する。
以下を下記の観点・割合にて評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)　・B(70点以上)　・C(60点以上)　・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
宿題・レポート	○	○		○		40%
OSCE		○	○			60%

履修上の注意

科目名	高次脳機能障害の理解				
科目名(英)	Learning of Higher Brain Dysfunction				
単位数	1	時間数	30時間	担当者	井上　聖子
実施年度	2023年度	実施時期	後期Ⅱ	担当者実務経験	言語聴覚士として病院に勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科昼夜間部　1年				
授業概要	高次脳機能障害における評価の手順(観察を含む) を組み立てることができる。神経心理検査の使い方を確認し、各領域の検査概要を覚える。特にコース立方体組み合わせテスト、レーブン色彩マトリシス検査、改訂 長谷川式簡易知能評価スケール (HDS-R)、Mini-Mental State Examination (MMSE)を実施できる ようになる。その他の高次脳機能障害の検査についても、概要を理解し、実施するための知識を身に付ける。国家試験対策のため、小テストの解説を覚え、アウトプットできる。				
授業形式	講義:　○	演習:	実習:	実技:	※ 主たる形態:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				高次脳機能障害の検査について説明できる。
○	○				国家試験問題を解くことができる。

テキスト・教材 参考図書

教科書 :白波瀬元道　ST評価ポケット手帳 ヒューマン・プレス、藤田 郁代 . 標準言語聴覚障害学 高次脳機能障害学.　医学書院

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	評価の流れ　原則・手続き・情報収集・鑑別診断とは	1年次の復習を30分程度しておく。
2	脳画像検査 基本	復習を30分程度しておく。
3	高次脳機能障害の検査　各論　コース立方体組み合わせテスト	復習を30分程度しておく。
4	高次脳機能障害の検査　各論　レーヴン色彩マトリックス検査	復習を30分程度しておく。
5	高次脳機能障害の検査　各論　HDS-R、	復習を30分程度しておく。
6	高次脳機能障害の検査　各論　MMSE-J、CDR	復習を30分程度しておく。
7	高次脳機能障害の検査　各論　COGNISTAT 認知機能検査,MoCA-J軽度認知障害スクリーニング等	復習を30分程度しておく。
8	高次脳機能障害の検査　各論　記憶機能検査(S-PA、三宅式記銘検査)	復習を30分程度しておく。
9	高次脳機能障害の検査　各論　記憶機能検査　(WMS-R)	復習を30分程度しておく。
10	高次脳機能障害の検査　各論　記憶機能検査(WMS-R)	復習を30分程度しておく。
11	高次脳機能障害の検査　各論　記憶機能検査(リバーミード行動記憶検査、等)	復習を30分程度しておく。
12	高次脳機能障害の検査　各論　注意機能検査の検査(TMT-J、BIT)	復習を30分程度しておく。
13	高次脳機能障害の検査　各論　注意機能検査の検査(BIT)	復習を30分程度しておく。
14	高次脳機能障害の検査　各論　注意機能検査の検査(CAT)	復習を30分程度しておく。
15	高次脳機能障害の検査　各論　注意機能検査の検査(CAT　等　)	復習を30分程度しておく。

評価方法

(1)小テストを実施　(2)定期試験 を実施する。
以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験	○	○				70%
小テスト	○	○				30%

履修上の注意

履修上の注意

科目名	運動障害性構音障害の展開				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	30時間	担当者	潮﨑　桃子
実施年度	2023年度	実施時期	後期Ⅱ	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部1年				
授業概要	①運動障害性構音障害についての基礎的な知識を理解し、その知識を診断・治療に活かすことができる ②医療人に求められる心構えや行動を理解し、ふさわしい行動ができる ③検査や訓練の実技演習を通して、症例を念頭に置いた技術を身につける				
授業形態	講義:　△	演習:　○	実習:	実技:　△	※　主たる形態:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				運動障害性構音障害のタイプごとの発生機序を知り問題点を抽出できる
○	○	○	○		運動障害性構音障害検査についてマニュアルを使用せず実行することができる
○	○				検査結果をもとに発生機序を知り、構音障害以外の症状にも注目し分析できる
○	○				それぞれ症状について発生機序にあわせた訓練立案ができる
○	○	○			基本的な訓練手技について目的を説明することができ、遂行できる

テキスト・教材 参考図書

ディサースリア検査　西尾正輝　著/インテルナ出版
ディサースリア臨床標準テキスト　西尾正輝　著/医歯薬出版株式会社
運動障害性構音障害学　廣瀬肇　著/医歯薬出版株式会社

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	講義概要、演習の進め方について、ディサースリアの検査法	前期の学習内容を振り返る
2	標準ディサースリア検査の概要	教科書・配布資料をもとに復習し自主演習をしておく
3	一般的情報の収集、発話の検査	教科書・配布資料をもとに復習し自主演習をしておく
4	実技演習 発声発語器官検査:呼吸機能、発声機能、鼻咽腔閉鎖機能	教科書・配布資料をもとに復習し自主演習をしておく
5	実技演習 発声発語器官検査:口腔構音機能	教科書・配布資料をもとに復習し自主演習をしておく
6	運動障害性構音障害の評価、検査のまとめ方	教科書・配布資料をもとに復習し自主演習をしておく
7	実技試験	実技試験の振り返り:到達点と反省点をまとめる
8	実技演習 検査結果の解釈の仕方、症例を想定した検査演習	教科書・配布資料をもとに復習し自主演習をしておく
9	症例検討:問題点の抽出および訓練立案について	グループごとに内容を深めておく
10	実技演習 運動障害性構音障害の訓練法(発声発語器官運動へのアプローチ)	教科書・配布資料をもとに復習し自主演習をしておく
11	実技演習 運動障害構音障害の訓練法(発声発語へのアプローチ)	教科書・配布資料をもとに復習し自主演習をしておく
12	運動障害性構音障害の訓練法(タイプごとのアプローチ)	教科書・配布資料をもとに復習し自主演習をしておく
13	運動障害性構音障害の訓練法(訓練の立案と実施)	教科書・配布資料をもとに復習し自主演習をしておく
14	訓練実技テスト・症例レポートの考察課題①	実技試験の振り返り:到達点と反省点をまとめる 考察内容を振り返り内容を深める
15	症例レポートの考察課題②、まとめ	考察内容を振り返り内容を深める

評価方法

(1)授業の中で小テストを実施する。(2)レポートを数回実施する。(3)検査実技試験を実施する。
(4)定期試験(筆記)を実施する。 以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験(筆記・実技)	○	○	○			80%
小テスト	○					10%
宿題・レポート	○	○		○		10%

履修上の注意

科目名	摂食嚥下障害の理解				
科目名(英)	Understanding dysphagia				
単位数	1	時間数	30時間	担当者	八木　智大
実施年度	2023年度	実施時期	後期Ⅱ	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年				
授業概要	摂食嚥下障害について基本的な概念を学びます。また、摂食嚥下障害によって引き起こされる合併症や関連障害が私たちの生活に与える影響について具体的に想像できるだけの知識を獲得します。嚥下障害や関連障害に対する訓練や支援方法を立案する為に、病態の評価方法や基本的技法を説明できるようになります。				
授業形態	講義:　○	演習:	実習:	実技:　△	※　主たる形態:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				摂食嚥下に対するリハビリテーションの目的を説明することができる。
○	○				摂食嚥下に関与する神経、筋を含む構造を説明できる。
○	○				健常人における摂食嚥下モデルを説明することができる。
○	○				摂食嚥下障害に対する基本的な評価技法を口頭で説明することができる。
	○		○		自らの考えをペア学習や個別課題の中で表現することができる。

テキスト・教材 参考図書

教科書:藤島一郎ほか「脳卒中の摂食嚥下障害　第3版　web動画付き」医歯薬出版株式会社 、2017
聖隷嚥下チーム「嚥下障害ポケットマニュアル　第3版」医歯薬出版株式会社、2018

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	嚥下障害総論～オリエンテーションと嚥下器官を描けるようになる～	教科書の該当部分を復習する。資料を基に嚥下器官の構造を図示できるようになっておく(1時間)
2	嚥下のメカニズムを学ぶ　～嚥下モデルについて～	教科書の該当部分を復習する。(30分)
3	嚥下のメカニズムを学ぶ　～嚥下に関わる筋肉について～	教科書の該当部分を復習する。(30分)
4	嚥下のメカニズムを学ぶ　～嚥下に関わる神経について～	教科書の該当部分を復習する。(30分)
5	摂食嚥下障害の原因と病態を学び列挙することができる。	教科書の該当部分を復習する。(30分)
6	脳卒中による嚥下障害を学び病態の特徴を説明できるようになる	教科書の該当部分を復習する。(30分)
7	中間テスト/摂食嚥下障害の評価　～情報収集と観察～	教科書の該当部分を復習する。(30分)
8	摂食嚥下障害の評価　～スクリーニング検査～	教科書の該当部分を復習する。(30分)
9	摂食嚥下障害の評価　～精密検査、VF編～	教科書の該当部分を復習する(30分)精密検査についてのマニュアルを全て読む。
10	摂食嚥下障害の評価　～精密検査、VE編～	教科書の該当部分を復習する(30分)精密検査についてのマニュアルを全て読む。
11	摂食嚥下障害の評価　～総合評価～	教科書の該当部分を復習する。(30分)
12	検査結果のデータから嚥下障害を評価する	教科書の該当部分を復習する。(30分)
13	摂食嚥下障害と栄養	これまでの授業内容を復習する(30分)
14	小児の摂食嚥下機能とは	これまでの授業内容を復習する(30分)
15	後半テストとその解説	前期授業の内容を振り返り後期授業に備える。

評価方法

(1)授業の中で小テストを6回実施する。 (2)定期試験(筆記)を実施する。
以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験	◎	◎				30%
中間テスト	○	○				30%
後半テスト		○		△		30%
小テスト				○		10%

履修上の注意

科目名	聴覚障害の検査				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	15時間	担当者	星子　隆裕
実施年度	2023年度	実施時期	後期Ⅱ	担当者実務経験	言語聴覚士として施設に勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年				
授業概要	言語聴覚障害および言語聴覚臨床について学修する上で基礎となる聴覚検査の技能を習得する。				
授業形態	講義:	演習:　○	実習:	実技:　△	※　主たる形態:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
	○	○	○		純音聴力検査を模擬的に実施できる。
	○	○	○		語音聴力検査を模擬的に実施できる。
○	○				中耳と内耳の機能の検査が説明できる。
○	○				検査結果を解釈できる。

テキスト・教材 参考図書

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	純音聴力検査　気導聴力　上昇法	レポート①純音聴力検査の行い方をA4 用紙一枚にまとめる(30分)
2	純音聴力検査　骨導聴力　マスキング	検査の練習を行うこと(30分)
3	語音聴力検査	レポート②語音聴力検査の行い方をA4用紙一枚にまとめる(30分)
4	インピーダンスオージオメータ	検査の練習を行うこと(30分)
5	内耳機能検査	検査の練習を行うこと(30分)
6	聴覚検査演習	検査の練習を行うこと(30分)
7	検査結果の解釈	レポート③純音聴力検査以降、結果によって選択される検査をわかりやすくまとめる(30分)
8	実技試験	実技試験を振り返り、繰り返し練習をする(1時間)
9		
10		
11		
12		
13		
14		
15		

評価方法

(1)授業の中でレポートを3回実施する。 (2)定期試験(実技)を実施する。(3)授業時の質問や取り組み
以上を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)・B(70点以上)・C(60点以上)・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
定期試験(実技)	○	◎	◎			70%
小テスト						
宿題・レポート	○	○		○		20%
質問・取り組み				○		10%

履修上の注意

科目名	成人聴覚障害の診断				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	30時間	担当者	星子　隆裕
実施年度	2023年度	実施時期	後期Ⅱ	担当者実務経験	病院にて言語聴覚士として勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年				
授業概要	聴覚障害に対する言語聴覚療法の評価診断および言語治療に関する知識・技能・態度を修得する。				
授業形態	講義:　△	演習:　○	実習:	実技:	※　主たる形態:○　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
○	○				成人聴覚障害の評価について概説することができる
○					補聴器、人工内耳の適応例を挙げることができる
○			○		評価サマリを作成することができる
○	○		○		模擬ケースカンファレンスにて模擬的に報告することができる
	○	○			模擬的に聴覚検査を実施することができる

テキスト・教材 参考図書

教科書:医学書院　藤田郁代(監)「標準言語聴覚障害学　聴覚障害学　第3版」

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	成人聴覚障害の評価概論	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
2	面接による評価	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
3	聴力検査の選択	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
4	純音・語音聴力検査☆　実習	練習してくださいね
5	語音聴力検査☆　**実技試験と単元テスト**	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
6	コミュニケーションおよび包括的聴力の評価	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
7	心理社会的側面の評価	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
8	聴覚補償機器	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
9	補聴器・人工内耳の適応と評価	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
10	中枢性聴覚障害	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
11	機能性聴覚障害　と**単元テスト**	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
12	情報補償	評価サマリを作成する(1時間)
13	評価サマリの作成	治療計画を作成する(1時間)
14	統合と分析、治療計画の作成	授業を振り返り、A4用紙一枚に内容をまとめる(30分)
15	症例報告会　**ルーブリック評価**	講座全体を振り返り、繰り返し学習する(1時間)

評価方法

(1)単元テストを2回実施する。(2)実技試験を1回実施する。(3)症例報告をルーブリックにて評価する。
以下を下記の観点・割合で評価する。
成績評価基準は、A(80点以上)　・B(70点以上)　・C(60点以上)　・D(59点以下)とする。

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
単元テスト×2	○	○				30%
宿題・レポート	○			○		10%
実技試験		○	○			30%
症例報告		○		○		30%

履修上の注意

科目名	臨床実習Ⅰ				
科目名(英)					
単位数	1	時間数	40時間	担当者	実習指導者
実施年度	2023年度	実施時期	後期Ⅱ	担当者実務経験	言語聴覚士として病院に勤務
対象学科・学年	言語聴覚学科　昼夜間部　1年				
授業概要	修得した知識・技術・態度を統合して言語聴覚療法の役割・職務を理解し、対象児・者の特徴と問題を把握できる。				
授業形態	講義:	演習:	実習:　〇	実技:	※　主たる方法:〇　その他:△

学習目標(到達目標)

言語情報	知的技能	運動技能	態度意欲	その他	目標
			〇		職業人としての態度・マナーを保ち行動ができる
			〇		臨床実習に主体的かつ積極的に取り組むことができる
		〇			対象児・者と共感を持ってコミュニケーションをとることができる
	〇		〇		必要な情報を収集することができる
			〇		施設の機能・特徴について理解できる

テキスト・教材 参考図書: なし

授業計画

回数	授業項目・内容	授業外学修指示
1	臨床実習Ⅰ、Ⅱセミナー:2023年3月6日(月)～3月11日(土) 実習における感染対策やリスク管理に関する講義を実施する。 見学実習に必要な知識・技術について講義等を実施する	
2		
3		
4		
5		
6		
7	臨床実習期間 2023年3月13日(月)～3月18日(土) ※施設お就業規定に応じて1週間実施(5日/週を基本とする)	
8		
9	。	
10	・	
11	・見学実習事後セミナー:2023年3月20日(月)～3月25日(土) 各施設で学んだことを共有するグループワークと実習内容の発表を実施する。 見学実習提出課題について担当教員よりフィードックを受ける。	
12		
13		
14		
15		

評価方法

臨床実習指導者が学校の定める成績評価の基準によって評価した、実習成績報告点6割
臨床実習期間中における学校評価項目による、評価点を4割

	言語情報	知的技能	運動技能	態度・意欲	その他	評価割合
実習課題の遂行		◎	◎	◎		60%
提出課題・連絡報告		◎		◎		20%
発表		◎		◎		20%

履修上の注意